は主に Type II, 枕丸, 腦を主に Type III の脱酵素酵素とされる。各臓器におけるシマリスの
脱酵素酵素活性の分布はラットの臓器分布はほぼ一
致し質的な差は見られなかったが、シマリスの肝臓、
腎臓の Type I 脱酵素酵素の活性はラットよりも低
かった。

7. 咽喉頭異常感をきたした疾患の検討
（第二病院耳鼻咽喉科）
土野信也・荒牧 元・新井信子・
嘉和知司・上田範子・岡村由美子

最近、咽喉頭異常感は耳鼻咽喉科を初診する患者の
なかでも多くみかけるようになっている症状の一つで
ある。その原因には鼻アレルギー等の鼻症状、喉頭、
喉頭、甲状腺、気管、食道、全身疾患や胃腸疾患等の多
数にわたり、その原因を特定することは多種の検査が必
要になる。今回我々は咽喉頭異常感症例の症状
からその原因部位の推定が可能かを検討し、多少の知
見を得たので、文献的考察を加えて報告する。

【対象】1993年1月から96年12月までに東京女子医科
大学附属第二病院耳鼻咽喉科を初診する異常感症例を
って初診した器質的疾患を特定しうる843例と器質的
疾患を特定できなかった327例の810例である。なお、
症状は1995年咽喉頭異常感症研究会世論人会による咽喉
頭異常感症診断指針（案）に基づいて症状を原因疾
患群別に分類した。

【結果および考察】異常感を主訴とした症例では、男
性で60%，女性で50%の症例で器質的疾患を認めた。
そして、器質的疾患の有無にかかわらず異常感を訴え
る症例は40から50歳に多かった、器質的疾患を認めな
い症例では、女性が男性の2倍と多く認められた。し
かし、器質的疾患を認めた症例では、男女差を認めな
かった、器質的疾患は主に中耳炎疾患が多く、炎症
性疾患が多く認められた。塗下時の症状は食道疾患と
頸椎疾患で多く認められた。特に、団生の塗下時に
伴う異常感は下塗下および食道の精査が必要である。

8. 高硬度 TSH 測定法の臨床的検討
（ラジオアイソトープ検査科）
山口伸之・小田川恵美・出村黎子

【目的】第三世代倉高硬度測定法による TSH 測定の
臨床的有用性について従来の IRMA 法と対比して検
討した。

【対象および方法】倉高硬度 TSH 測定法として「DP・
イムライズ HS-TSH」を用い、各種甲状腺疾
患の血清および塗下体疾患の TRH 負荷試験後血清に
ついて測定を行った。

【結果】本法の倉高硬度測定法の倉高硬度
IRMA 法の0.1μU/ml に比較して極めて高く、正常範
囲は0.4～4.0μU/ml で、IRMA 法の0.2～4.0μU/ml
とほぼ一致していた。IRMA 法による TSH 測定感
度以下であったバセドウ病では33検体中92検体、中毒
期の垂体前部下垂体炎、手術後の甲状腺炎および甲状腺
腺腫では本法によってすべて測定が可能であった。バ
セドウ病患者の薬物治療経過では、12例中6例で
IRMA 法より3～16週早期に TSH の上昇が確認さ
れた。手術後 TSH 抑制療法のため甲状腺ホルモン投
与中の分化型甲状腺癌2例の TSH は、IRMA 法では
常に測定感度以下であったが、本法によれば
0.05～0.06μU/ml の範囲で変動を認め、経過観察
間を通じて測定が可能であった。下垂体疾患も本法に
よる TSH 基準値の測定は、TRH 試験による分泌予備
能をよく反映していた。

【結論】本法は測定感度が極めて高く、TSH 分泌の
抑制の程度を知ることができ、下垂体-甲状腺疾患など
の診断および治療経過の観察に有用であった。

9. 血漿レプチン濃度の臨床的意義に関する検討
（第二内科）
三品直子・成瀬清子・安達千恵・田部井由実
吉本貴宣・成瀬光栄・出村 博

【目的】肥満症レプチンの臨床的意義を考察する。

【方法】男性38名、女性166名（妊娠90名）を対象に
血漿レプチン濃度および体脂肪率を測定、両者の関係
を検討した。

【結果】BMI＜25の場合はレプチン濃度は女性
が有意に高く、また同濃度は BMI、体脂肪率と正相関
を示すが、加齢による変化は見られず、BMI 不変の同一
人物では日差変動は認められなかった。急性的生理
的、非生理的インスリン血症では変動はなく、妊娠時
には、BMI との相関を示さなかった。

【考察】血漿レプチン濃度には性差があり、体脂肪
率とは良好な相関を示す。以上より、同濃度は体脂肪量
の定量的な指標となることが示唆された。

10. 高血圧における血管壁 Heme Oxygenase
（HO）/Carbon Monoxide（CO）合成系の病態生理学
的意義
（第二内科学）
関 謙郎・成瀬光栄・
成瀬清子・吉本貴宣・田部井由実
関 昌美・安達千恵・田部井由実・
曾 正隆・出村黎子・出村 博
【目的】ヘモ代謝に関与するHOは副産物としてCOを産生する。COはsoluble guanylate cyclaseの活性化、cGMP生成を介して血管壁のトーヌスや構造を制御することが示唆されているが、高血圧における病態生理学的意義は不明である。今回我々は、高血圧ラットの組織中HmRNA発現動態および血圧調節における内因性HO/CO系の役割を検討した。

【方法】12週齢の雄性SHR-Sp/Izm、対照として同籠のWKY/Izmを用いた。各種組織中HO（HO-1：誘導型、HO-2：構成型）mRNAの発現はRNAase protection assayで解析した。また、in vivoにてHO阻害剤であるZnPP-IXを授与し、内因性COの血圧調整における役割を検討した。

【結果】①SHR-Sp/Izmの大動脈、腎臓におけるHO-2mRNA発現は対照と比べ有意に増加していたが、他の組織では両群間で差を認めなかった。②HO-1mRNAは両群間で差を認めなかった。③ZnPP-IX授与により、SHR-Sp/IzmおよびWKY/Izmの両群で有意な昇圧を認めたが、SHR-Sp/Izmにおいてより顕著であった。

【結論】①内因性COは血圧調節に関与している。②高血圧状態では血圧上昇に対する代償機構としてHO/CO系が重要な役割を担う。

11. 経腸分娩後の子宮破裂の例
（第二病院産婦人科）伊藤章子・酒井啓治・村岡光恵・高木耕一郎・黒鳥津子
近年産科医療の発達により周産期死亡は減少傾向にあるが、母体死亡、妊娠障害の増加は依然として低くはない。その原因として子宮破裂等の出血性ショックが最も多く、全妊娠死亡の19.6%を占めている。今回我々は他院にて経腸分娩後に子宮破裂を認めた、投薬された例を経験したので報告する。

症例は29歳の1回経産婦で既往歴に特記すべき事項はない。近医にて妊娠健診を受診していた。妊娠38週2日、自然破膜発来後2時間20分の経過で経腸分娩にて、3,010gの女児を娩出した。分娩後出血量が多く、顕管裂傷を認めたため縫合したが止血せず、血圧は70/40と低下した。輸血を施行したが、血圧の上昇を認めないため当科へ搬送された。

入院時血圧74/36, 意識は不明瞭であった。左下腹部は軽度に膨隆し、同部に圧痛を認めた。超音波検査にて子宮前方に腫瘍を認め、内診にて血腫を含む多量の出血を認めた。顕管裂傷の延長による子宮破裂と診断し、緊急開腹手術を施行した。剖腹時子宮頸部左側の後腹膜下に血腫を認め、血腫除去後子宮頸部上方、顕管裂傷の延長上に破裂部を認めた。手術は直式単純子宮全摘術を施行した。推定術前出血約300ml、術中出血2,000mlであった。術後経過は順調で術後16日目にて軽快退院した。

本症例は子宮破裂より出血性ショックとなったが、その後の適切な処置により救命したと考えられる。

12. 脾摘後に重症感染症を繰り返した糖尿病の1例
（第三内科、感染対策科、第一病理解）
佐藤賢一・伊藤威之・中村朋男・高橋千恵子・岩崎直子・小田桐玲子・岩本秀之・戸塚圭一・沢田達男
糖尿病患者における免疫力低下、易感染性については広く知られている。一方脾摘患者においても免疫力低下が認められ、特に抗麻疹有する細菌に対する易感染性が指摘されている。本症例は脾摘により補体価が低下し、重篤な肺炎を併発した後により高熱を伴う、脾摘後の糖尿病患者の免疫力低下について、病理検討を加えて検討したので報告する。

症例は57歳、男性。1966年溶血性貧血と診断されステロイド療法を開始されたが効果がなく1969年脾摘術を施行した。1971年までステロイド療法を併用した。糖尿病は1967年に併発しインスリン療法が開始された。以後も肋膜炎、肺炎をくり返し、1997年1月6日死亡苦を主訴に近医に入院、肺炎と診断された。抗生剤投与をされたが効果がなく、1月14日当センターに転院した。クレプシエラ肺炎、急性呼吸不全と診断し、抗生剤投与、調整呼吸を開始した。著しく免疫力が低下していたにもかかわらず適切な抗菌コントロールを実施した。抗生物質療法により転院後10日目には肺はほぼ完全回復し、肺炎の経緯が遅延したため溶血性貧血が急性増悪し、さらに播種性血管内凝固症候群を併発し、不幸な転帰となった。

今後も脾摘した糖尿病患者における感染症の治療に際しては、当初より対因治療を想定し、迅速かつ適切な抗菌療法が必要である。

13. 頜面神経麻痺による反復性顔面神経麻痺の1症例
（耳鼻咽喉科学、神経外科学
放射線医学、耳鼻咽喉科総合病院耳鼻咽喉科）
西口一夫・高山幹子・石井哲夫・鍋島みどり・井沢正博・鈴木恵子
反復性顔面神経麻痺は内科的な病状であるが

— 495 —